

第1012回オーチャード定期演奏会

3月9日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

第168回東京オペラシティ定期シリーズ

3月12日(水) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第1013回サントリー定期シリーズ

3月14日(金) 19:00開演 サントリーホール

3
/ 9

3
/ 12

3
/ 14

指揮：ケンショウ・ワタナベ ※当初の発表から変更となりました。

ピアノ：高木竜馬*

コンサートマスター：近藤 薫

ストラヴィンスキー：

バレエ音楽『ペトルーシュカ』(1947年版)* (約35分)

第1場：謝肉祭の市場 第2場：ペトルーシュカの部屋

第3場：ムーア人の部屋 第4場：謝肉祭の市場(夕景)

ー 休憩 (約15分) ー

ウェーバー：

歌劇『オベロン』序曲 (約10分)

ヒンデミット：

ウェーバーの主題による交響的変容(ヒンデミット生誕130年)
(約20分)

I. アレグロ II. 「トゥーランドット」スケルツォ：モデラート

III. アンダンティーノ IV. マーチ

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：Bunkamura (3/9)



♪ 本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。

♪ 演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフのご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。

♪ 曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せず判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。

♪ 演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

♪ 演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。終演後のカーテンコールも、マナーを守ってお楽しみください。

出演者プロフィール



©Abigel Kralik

指揮

ケンショウ・ワタナベ

Kensho Watanabe, conductor

ケンショウ・ワタナベは、ダイナミックな音楽性、思慮深い解釈、指揮台での魅力的な存在感で国際的に高く評価されている。昨シーズン、メトロポリタン歌劇場でケヴィン・ブッツ『めぐりあう時間たち』を成功させ、今シーズンはブッチャーニ『ラ・ボエーム』8公演でメトロポリタン歌劇場に再登場する。2024-25シーズンのハイライトには東京フィルとの再共演、カルガリー・フィル、セントルイス歌劇場へのデビューがある。2023-24シーズンにはブッチャーニ『蝶々夫人』でデトロイト歌劇場デビュー、モントリオールのローシュテル・メトロポリタン管弦楽団、ミネソタ管弦楽団、ダブリンのRTEコンサート管弦楽団に再登場。近年の活動にはセイジ・オザワ松本フェスティバル、ケバック交響楽団、フィラデルフィア管弦楽団との共演があり、フィラデルフィア管とは2016年から2019年までアシスタントとして在任して以来、密接な関係を維持している。フランスのパリを拠点とするワタナベはヴァイオリニストとしてイエール大学音楽院で修士号を取得した後、カーティス音楽院の初代指揮フェローとしてネゼ＝セガンとオットー＝ヴェルナー・ミュラーの両氏に師事。またイエール大学で分子生物学、細胞生物学、発生生物学を学び、理学学士を取得している。



©Yuji Ueno

ピアノ 高木竜馬

Ryoma Takagi, piano

第16回エドヴァルド・グリーグ国際ピアノコンクールにて優勝及び聴衆賞を受賞し一躍世界的に脚光を浴びる。その他にも7つの国際コンクールで優勝。オスロ・フィル、ベルゲン・フィル、ウクライナ国立フィル、ウィーン室内管、NHK交響楽団、東京フィル、東京交響楽団、日本フィル、新日本フィル、大阪フィル、大阪交響楽団、関西フィル、日本センチュリー交響楽団、京都交響楽団、群馬交響楽団、神奈川フィル、富士山静岡交響楽団、ARKシンフォニエッタ等のオーケストラと、ハンス・グラーフ、エドワード・ガードナー、ゲルゲイ・マダラシュ、アンドレア・バッティストーニ、小林研一郎、秋山和慶、尾高忠明、高関健、佐渡裕、藤岡幸夫、沼尻竜典、下野竜也、鈴木優人、杉本優、三浦文彰等の指揮で共演。NHK総合『ピアノの森』では雨宮修平メインピアニスト役で出演した他、映画『アナログ』や『題名のない音楽会』などメディアや音楽祭への出演多数。デビューアルバムとなる『Metamorphose』をリリースし好評を博す。京都市立芸術大学専任講師に就任し後進の指導にも当たっている。

コラム ヒンデミットとバレエ・リュス

首席指揮者アンドレア・バッティストーニの2025年最初のコンサートは、ストラヴィンスキーの『ペトルーシュカ』とヒンデミットの『ウェーバーの主題による交響的変容』、そしてウェーバーの歌劇『オベロン』序曲。

このプログラムは、バレエ・リュスのダンサーとして1910年代後半にニジンスキーとともに『ペトルーシュカ』を踊ったレオニード・マシーンの存在によって結びついている。マシーンは後にヒンデミットと『高貴なる幻想』で協力し、さらにヒンデミットに対してウェーバーの音楽を別のバレエのために編曲するよう提案した。『交響的変容』は当初コンサート用作品として構想されたが、後にバレエ・リュスのもう一人の後継者であるジョージ・バランシンによって振付けられることとなった。(Bachtrackより)



レオニード・マシーン
(Léonide Massine,
1896-1979)
レオン・バクスト画

楽曲紹介

解説＝沼野雄司

パッティストーニによるストラヴィンスキーの三大バレエ完結編。この3曲、一般的には『春の祭典』がもっとも演奏至難と思われがちだが、実は『ペトルーシュカ』こそが曲者なのだ。3体の人形が登場するという物語構造、そしてもともとピアノ協奏曲として構想されたことによって音響はさわめて多層的な様相を呈しているし、各楽器の独奏における難所（例えばトランペット!）の数々は『春の祭典』をはるかにしのぐ。この曲にくわえて、ウェーバー最後の作品『オベロン』序曲と、彼の主題を用いたヒンデミット作品というラインナップは、一見すると実にカラフルで洒落ているが、ここにも難所が続々と……。最初から最後まで気の抜けない、楽団の真価が試されるプログラムである。

ストラヴィンスキー

バレエ音楽『ペトルーシュカ』（1947年版）

1911年に作曲された『ペトルーシュカ』は、イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882-1971）がロシア・バレエ団のために書いた2作目のバレエ。

もともと彼は「ピアノが重要な役割を演じる、小協奏曲風のオーケストラ曲」を構想していたという。しかしバレエ団の総裁ディアギレフの勧めによってその素材をバレエ曲へと移しかえ、さらには数々のロシア民謡、19世紀ウイナ・ワルツの作曲家ランナーやリムスキー＝コルサコフの作品の引用をパッチワークのように散りばめることになった。楽曲を特徴づける多層的な響きは、こうしたコラージュ的な性格によるものといえるだろう。

バレエ全体は、交響曲の4つの楽章のような4つの場からなるが、それぞれは小太鼓の連打で連結されているため、初めて聴く際にも分かりやすいはず。

第1場は、謝肉祭の市場。人々の喧騒の中から、オルガン奏者が姿をみせ、やがて踊り子がトライアングルとフルートの伴奏で踊り始める。縁日の雰囲気が徐々に高まると、コントラファゴットの響きとともに魔術師が登場。ペトルーシュカ、踊り子、ムーア人という3体の人形に生命が与えられたことが、フルートで示される。

続いてあらわれるのが有名な「ロシアの踊り」。ロシア民謡をピアノの平行和音で装飾したこの響きは、一度聴いたら忘れられない。

第2場は、5分に満たない短い部分。前半は一人で部屋に投げ込まれたペトルーシュカの不安が複調で綴られる。後半は、踊り子があらわれて変拍子による奇妙な踊りを披露するが、ペトルーシュカの求愛をはねのけて去ってしまう。

第3場は、スケルツォ的な部分。まずはムーア人の旋律が、弦のピツィカートの上で歌われる。クラリネットとファゴットによる陰影が絶妙。ほどなくしてトランペットの独奏によって踊り子が登場。平凡な3拍子のワルツ(ライナーからの引用)を踊り始める。この旋律が多層的に発展する部分はきわめて現代的な響き。すると、突如として嫉妬に燃えたペトルーシュカが登場し、大混乱に陥る。

第4場は再び市場。ロシア民謡による「乳母の踊り」がオーボエの先導で響きだす。その後は、チューバの効果を生かした「熊を連れた農夫」、そして弦楽器と金管がやりとりを交わす「御者の踊り」へ。やがて弱音器付きトランペットがペトルーシュカの登場を告げるが、続いて登場したムーア人のナイフが彼を切り裂き、音楽は虚しい断片を途切れ途切りに奏でる。ホルン群のゆらめくような音形が静かに広がってゆくと、最後にペトルーシュカの魂をあらわす鋭いトランペットの咆哮が何度も響き渡って、全曲を閉じる。

【作曲年代】1911年 【初演】1911年6月13日、パリ、シャトレ座にて、ピエール・モントゥーの指揮、バレエ・リュス(ロシア・バレエ団)による

【楽器編成】フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3(3番はバス・クラリネット持ち替え)、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(タンブリン、小太鼓、大太鼓、シロフォン、トライアングル、シンバル、タムタム)、ハープ、チェレスタ、ピアノ、弦楽5部

ウェーバー 歌劇『オベロン』序曲

劇団を経営する父のもとに生まれたせいなのだろう、カール・マリア・フォン・ウェーバー(1786-1826)の音楽は、『魔弾の射手』を筆頭とするオペラ作品はもちろん、劇付随音楽『トゥーランドット』、あるいは純粋な器楽曲も含めて、常に「劇」の息遣いをたたえている。当時のオペラ後進国ドイツで孤軍奮闘した彼の存在がなかったら、ワーグナーの楽劇も生まれていなかったかもしれない。

歌劇『オベロン』は、作曲者最晩年の1826年の作品。イギリスのコヴェントガーデンの委嘱だが、死期の近づいたウェーバーは病をおしてロンドンへと渡り、自身の指揮で初演を行なったという。物語はヴィーラントの叙事詩を基にしながら、そこにシェークスピアの「真夏の夜の夢」と「テンペスト」を混ぜ合わせたもの。

冒頭はホルンから始まる。森の魔法。やがて徐々に妖精たちが目を覚まし、ファンファーレのような音型を経て、突然のフォルテシモの和音を合図にアレグロ主部へと向かう。この主部は、何よりヴァイオリンの走句が爽快。元気よく走り回る、走り回る……。やがてテンポを落としてクラリネットの独奏が響きだすと、一気に濃厚な舞台の香りが漂ってくる。

【作曲年代】1826年 【初演】1826年4月12日、ロンドンにて、作曲者自身の指揮による

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

ヒンデミット ウェーバーの主題による交響的変容

パウル・ヒンデミット(1895-1963)の生涯は、なかなか波乱万丈だ。

若い頃は歌劇場のコンサートマスター、そしてアマール弦楽四重奏団などで弦楽器奏者として活躍。作曲家としては表現主義的なオペラや器楽作品で頭角をあらわすものの、オペラ『画家マティス』がナチスから「退廃音楽」との烙印を押され、やむなく祖国を離れることになる。トルコ、スイスを経て、1940年にたどり着いたのが新天地アメリカだった。彼はこのあと、およそ13年にわたってアメリカで作

曲活動を行うことになる。

1943年、コネチカット州でイエール大学の教授をつとめていたヒンデミットが、ニューヨーク・フィルのために書き上げたのが、「ウェーバーの主題による交響的変容」である。故郷ドイツの作曲家ウェーバーの『4手のためのピアノ曲集』『トゥーランドット』からいくつかの主題を抜き出し、それを大管弦楽のためのカラフルな楽曲に仕立て上げたこの作品は、翌年1月に初演されるや否や、アメリカの聴衆や批評家から大喝采を得て、瞬く間に人気曲となったのだった。全体は4つの楽章からなる。

第1楽章(アレグロ)は、ウェーバーの4手のための「8つの小曲」の第4曲を主題に持つ。この主題は、かなり激しい性格の下行音型からなるが、ヒンデミットは多彩な楽器法を駆使しながら、これをジェットコースター的な面白さで処理してしまう。

第2楽章(スケルツォ、モデラート)はウェーバーの劇音楽『トゥーランドット』の序曲で用いられた中国風の旋律が主題。開始部はほぼ原曲を踏襲しているものの、その後は打楽器や管楽器のエキズチックな響きを最大限に用いながら、悪趣味といえるほどの手練手管で主題を変容させてゆく。また、明らかにジャズ的な雰囲気を持っている中間部でのトロンボーン主題が対位的に発展する様子は圧巻だ。

第3楽章(アンダンティーノ)は緩徐楽章で、4手のための「6つの小曲」第2曲を用いたもの。クラリネットを中心とした木管群、そしてチェロが活用されて柔らかな響きを形づくる。そして最後の**第4楽章(マーチ)**は、4手のための「8つの小曲」第7番の主題による。諧謔的な表情を持ったマーチだが、全楽器が徐々に稼働してゆく様相は、オーケストラ好きならば手に汗握ること間違いなしだろう。

【作曲年代】1943年 【初演】1944年1月20日、ニューヨークにて、アルトゥール・ロジンスキ指揮ニューヨーク・フィルハーモニックによる

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(タン布林、小太鼓、テナードラム、大太鼓、トライアングル、小ゴング、ウッド・ブロック、小シンバル、シンバル、チューブラーベル、タムタム、グロッケンシュピール)、弦楽5部

めまの・ゆうじ／東京藝術大学大学院博士課程修了。博士(音楽学)。現在、桐朋学園大学教授、神奈川芸術文化財団芸術参与。2008年度、2020度にハーバード大学客員研究員。著書に『現代音楽史 闘争しつづける芸術のゆくえ』(中公新書、第34回ミュージック・ペンクラブ賞)、『エドガー・ヴァレーズ 孤独な射手の肖像』(春秋社、第29回吉田秀和賞)など多数。